世界は誰の為のモノか。

子の月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界は誰の為のモノか。

【Ｎコード】
Ｎ０５０９Ｍ

【作者名】
子の月

【あらすじ】
チルドレンの現場担当主任の『皆本光一』が洗脳と暗示によって作られた人格で、その弊害により多重人格者（エスパー人格もあったり無かったり）だったら・・・という妙な設定です。作者はアニメしか見ていないので、いたらないところが多いと思います。さらにアンチバベルですので、不快になると思う方はご遠慮ください。・・・ちょっとＢＬっぽい表現が入るかも知れませんが、それでもＯＫという方のみ、どうぞ読んでやってください。

浚い戻され苦悩させ（前書き）

アニメ第１０話　釜中之魚（ふちゅうのうお）！いそげバベル２！！　のその夜から話が始まります。

浚い戻され苦悩させ

潜水艦バベル2に取り残された坊やとクイーンにちょっかいを出しに行ったその日の夜。

兵部京介はどうしても気になる事があって眠る気になれなかった。

「キョウスケ～ドウシタンダ？何考エ込ンデイルンダ？」

「ちょっと腑に落ちないことがあってね。ただの坊やだと思っていたけど、少し違うようだと思ってね」

桃太郎が不審に思ったのか、話しかけてきた。それに返事をしながらも拭えない違和感に再び考え込んでしまう。

催眠状態にして操ろうと思って心の深層に踏み込んでみたが、単純純情な坊やのモノとはとても思えないほど、深く、とても短時間では読みきる事が出来なかった。

時間が無かったとはいえ、兵部でさえ透視(みき)れない深層心理。単に耐性があると言うだけで片付けていいものか。

「それに僕は最初の催眠の時、彼女達に恋愛感情も持つように仕向けたんだけど、それが何故か解除されていた」

「オマエミタイニ『ロリコン』ジャナイカラ、カカラナカッタンダ

ロ」

「なんだと！この齧歯類！！」

「ヤルカー！この『ロリコン』！！」

「ともかく僕は気になるととことん突き詰めて調べたくなるんだ。と言うことで、ちょっと迎えに行って来るよ」

「アイツ『ロリコン』ダケジャナク『変態』ニナル気カ？」

桃太郎のその呟きは幸いにして、誰の耳にも届かなかった。

兵部の探究心と気まぐれにより、眠っている所をさらわれた皆本。ぐっすりと眠っている彼を見つめ兵部はため息をついた。

「皆本光一。光一（コウイチ）なるほど彼にふさわしい名前だね。彼がチルドレンを明るく照らす太陽なら、さしずめ僕は闇へと導く月（ムーン）といったところかな？」

「んっここは？」

「ようこそ皆本光一君。ここは僕の秘密のアジトの一つさ」

兵部の声にうっすらと目を開ける皆本だったが、まだ完全に覚醒していないからか、ぼんやりしている。

「・・・・・兵部京介少佐・・・・・」

「場所を特定するようなものは周囲にはないよ。残念だったね」

「何故、こんなところに？」

「さあ？殺す為、かもしれないよ？」

「申し訳ありませんが、自分は『皆本光一』ではないので、そのような挑発は無意味です」

確かにいつもの『皆本光一』ならば激昂しブラスターを抜いて攻撃態勢にはいっていただろう。

しかし、目の前の彼は挑発に無反応でさらに、どちらかと言えば友好的に兵部に接しているように見える。

戸惑いながらも、何かの罠かと油断無く皆本を見つめる兵部。

「それはどういうことかな？僕は間違いなく、『皆本光一』をさらってきたつもりだったのだけれどね？」

「キョウスケ、本当ニ連レテ来タノカ？」

「ああ齧歯類。丁度良かった、この坊やで少し遊ぼうかと思ってつれて来たんだけど、どうも様子がおかしいんだ。君の目から見ても、坊やは坊やだよね？」

「アノ眼鏡ヤローダロ？オ前ガ男ヲ連レ込ム変態ダッタトハ！！」

「この齧歯類！！」

「ウワー何スルンダ！！」

「しばらく散歩にでも行っていろ！！」

夜空の彼方に放られた桃太郎と肩でゼエゼエ息をついている兵部を呆れたように見つめ、『長い間生きていると前頭葉が退化して切れやすくなるって本当なんだな』と場違いな事を思っていた。

「で？君が『皆本光一』では無いってどういう意味？」

「正確には、『皆本光一』の別人格であると言いたかったんですけれど」

不遜な思考と読まれたのかと焦ったけれど、そうではなかったらしい。

焦った自分をごまかすように、皆本はゆっくりと起き上がると体を

伸ばして、「体の所有権を貰うのは久々です」と言いながら、体を動かす感触を確かめていた。

「別人格？」

「自分の名前は『月（ムーン）』と言います。光一の光から表を『太陽（サン）』そして裏が自分と言うわけです」

「それで、その『月（ムーン）』が何故ここに？」

「さあ？自分は連れてこられただけなのでわかりかねます。ただ自分の起動条件は『バベルと繋がりの無い条件で名前を呼ばれる事』なので・・・」

「僕が月（ムーン）と言ったから起きてしまったというわけかい？」

「そう推測できます。・・・加えて自分は君と話してみたかった。からでは無いでしょうか」

「『君』って・・・」

『皆本光一』では決してありえないような好意的なまなざし、そして、その声で親しげに『君』と呼ばれる違和感に固まっていると、それをどう解釈したのか、皆本は困ったように弁明してきた。

「不味かったですか？『貴様（きさま）』ではあまりに敵対的すぎるし、『貴方（あなた）』ではかしずく響きで自分達の関係上ふさわしくない。しかし『

兵部』ではいつも太陽(サン)が警戒心をむき出しにして呼んでいるのでどうかと思いますし、『京介』なんて名前で呼ぶのはいかにも馴れ馴れしい。郷に入っては郷に従えとはいいますが、部下でもない自分が『少佐』と呼ぶのもおかしい。・・・なので先程、自分の事を『君』と呼びかけられたので、『君』と言ったのですけれど、やっぱり自分より年配の方に『君』は駄目でしたか・・・しかしそうなると・・・」

まくし立てるように焦って話している『彼』を見ていると、チルドレンにからかわれて焦っている『彼』と間違いなく重なって見えて、警戒している自分が馬鹿馬鹿しく思えてくる。

「ぷっくっくっく。あっはっはっは。あー可笑しい。わかった君は間違いなく坊やだね」

「何を持ってそう判断されたのかは理解しかねますが、その通り、自分は『洗脳』されなかった『皆本光一』です」

「洗脳?!」

「おかしいと思いませんか?何故、予知でエスパーを殺す筈の『皆本光一』と言う存在が、こんなにもエスパーに対して寛容なのか?それなのに君とは敵対しあっさりと見捨てようとする。人として矛盾していると思いませんか?」

「その答えが洗脳と言うわけだね」

「気が付いたのは幼稚園の頃、エスパーに嫌悪感を示した先生がある日突然何処かへ引っ越してしまい、それからおかしいと思い始めました。自分の周りにはエスパー擁護者しかいないことに」

「それって」

「おそらくは刷り込みと言うやつでしょうね。自分達の都合のいい人格を作り上げるための。そこで自分達『皆本光一』は人格を『太陽(サン)』『月(ムーン)』に分けて様子を見ることにしたんです」

「表層で暗示を受ける方と、下層で受けない方を作ったと言うわけか」

「はい。ある程度まではそれで問題なく切り抜けていました。しかし、ある日医者を装ったサイコメトラーに僕の深層意識を覗かれてしまいまして」

「それでばれてしまったと?」

「いいえ。それならおそらく自分はここにはいないでしょうから。LV5のサイコメトラーが読み取れない深層意識だったから問題視されたんでしょうね。より強力な洗脳を施す為、研究機関へ、そしてコメリカへ送られました。IQが少しばかり高いくらいで小学校を追い出して研究所へ送るなんて、変だと思いませんか?」

「そんな話が・・・」

「自分はね、『エスパーVSノーマルの戦い』って実は出来レースつまり八百長だと考えているんです。エスパーとノーマルの過激派同士が潰し合いをしてその後に残った者達が手を取り合って共存す

る。そんなシナリオを書いた奴がどこかにいて、自分達はそのシナリオ通りに動かされている。そんな気がしてならないんです。『太陽』はその誰かが『運命』なんてロマンチストな事を言っていましたけど」

「坊やらしいね。しかし意外だったね。僕の情報では君は『エスパーVSノーマルの戦い』の予知を知らない筈なんだけどね」

「洗脳や暗示の初期段階で調べました。『太陽』も知ってる筈なんですが、『運命』に都合の悪い事は覚えていないし、世の中の全てを綺麗事として考えるように洗脳されていますから」

「その枠から外れたものは排除？」

「そういう風に躾けたかったんでしょうけれど、自分が深層心理にいるせいでその辺は曖昧です。ほら、君にも銃は向けるけど発砲はしない。でしょ？」

「確かに、君は僕が銃を取り上げるとホッとした顔をするよね」

「自分達の総意としては、同じように『運命』に振り回されている君をどうこうしたくないわけです。もし君が捕まるようなことがあれば、おそらく今度の檻は自分が作ることになるでしょう。そして自分は命令のままに君を閉じ込められる檻を作ってしまう。今度は絶対に脱出不可能な檻を・・・そうならないように気をつけてください」

「わかった。くれぐれも気をつけよう」

「あと、君は一体何をしたんですか？君への捕縛命令に『半殺し程度なら余裕でＯＫ！むしろ息の根を止め手も構わない！！』って言う暗示が織り込まれていましたけど？」

「プッ、いや別に桐壺君に『チルドレンを嫁に』って言っただけだよ？」

「・・・ああ成程、彼はチルドレンに甘いですからね」

「アレ？君、ひょっとして桐壺君嫌い？」

言葉から滲み出る嫌悪感を感じ兵部が疑問を投げかけると、皆本はあっさりと肯定し、鬱憤を吐き出すように話し出した。

「意外ですか？エスパーとノーマルの共存を謳いながらも結局はエスパーを飼いならし、さらには高ＬＶエスパー至上主義、そして一番嫌なのはそんな奴の下で働いている自分自身です。ああ、すいません、愚痴っぽくなってしまって・・・」

「いや、構わないよ。単なる箱入り坊やだと思っていたから、意外だっただけさ。さっもう夜が明ける、送っていこう」

部屋のベランダまで送り届けて、帰ろうとする兵部に、皆本は焦ったように引き止める。

「あっあの」

「なんだい？」

「また、こんな風に話を聞いてもらってもいいですか？」

「・・・もちろん」

「ありがとうございます」

お互い笑顔で別れた。また、いつか会うことまで約束して。

しかし、帰ってきた兵部京介の顔には苦渋の色が浮かんでいた。

「それでも、僕は・・・」

浚い戻され苦悩させ（後書き）

何故、アニメ１０話からかというと・・・そこから見始めたから・・・だったりします。

ファンの方、ごめんなさい！！

最近ケーブルＴＶでやってるのを見て、娘がハマって、私も見るように・・・

でも、バベルやその世界の大人の考え方にどうしても納得が出来ず、見切り発車で始めてしまいました。

アニメしか見ていないし、アンチ入ってるし、文才も無いので、見苦しい点は多々あると思いますが、生温かい目で見てもらえるとうれしいです。

これからもよろしくお願いします。

空を彩る光　真木編（前書き）

第２０話　超獣戯画（ちょうじゅうぎが）！時にはケダモノのように…から

理由は単純。そこから録画しだしたからです。

その前のは事故で消えてしまいました（泣）

皆本、多重人格、エスパーなオリ設定です。

嫌悪感を持つ方はＵターンでお願いします。

空を彩る光　真木編

兵部が住居としている一室に真木が訪れていた。

「珍しいね。真木、君が直々にやってくるなんて」

「少々疑問を感じまして」

「疑問？」

「私は先日のアメリカのエスパー脱走未遂事件の揉み消しを行ったのは貴方だと思っていました」

「うん、間違いじゃないよ。僕がやった」

「しかし、貴方だけでやったわけではありませんね？ただ情報を撹乱するだけでなく、秘密捜査の一環だったと見せかけるやり方は貴方らしくない。当初からそれは疑問に思っていました」

「さすが真木鋭いね。そうだね、僕ならそんな面倒な事はせずにその全て情報消してなかった事にするだろうね。僕がやったのは数人の記憶をいじった程度さ」

「では、その情報を操作した人物は？パンドラ内の人間であそこまで完璧にハッキング、情報操作ができる人物はいません。それに・・・見てください」

真木が示したパソコン画面には一通のメールが表示されていた。

「なになに、なるほど、パンドラの新たなメンバー候補だね。これがどうかしたのかい？」

「我々はこの『シン』と名乗る者がずっと我々の知らない貴方の配下か貴方自身だと思っていました。しかし、貴方の周りにはそのような者の姿はないし、今の様子からするに貴方自身でもない。この『シン』とは何者ですか？メールを追跡してみましたが相手を特定する事は出来ませんでした」

「それは僕自身も聞きたいね。パンドラに協力しながら姿を見せず、こちらに見返りも求めていないなんて、一体どんな奴なんだろうね」

興味がありそうだが自分では探す気がないらしく、「なんとか探し出してよ」と自分に丸投げする上司に、諦めたようにため息を付く。

次の案件に移ろうと報告書を渡そうとするのだが、これも見る気がないらしく、全く違う話題を振ってくる。

「ところで、齧歯類知らないかい？昨日の夜から姿が見えないんだけど」

「さあ？見ていませんが、食料でも調達に行ったんじゃないですか？」

「勝手に出歩くなって言ってるのに」

少佐のペットの脱走なんて珍しくもない。

報告を続けようとしたところで、部屋にテレポートして来た者がいた。

お気楽なように見えて、少佐はパンドラのトップだし、エスパー史上最悪の犯罪者だ。いつ狙われてもおかしくは無い。

そのために少佐の居場所は厳重に秘されていたのに、何故露見したのか？

相手はまだ少年のように見えるが、超能力者を見た目で判断すると痛い目を見る。

油断なく他にテレポートしてくるものがいないか様子を伺う。

「少佐、下がっててください」

『助けて、桃太郎が・・・ちるどれん』

しかし、少年は攻撃する気はないらしく、途切れ途切れではあるがこちらにテレパスを送ろうとしているようだ。

「桃太郎？齧歯類がどうかしたのか？」

「少佐！」

「大丈夫、彼は単なる幻影だよ。それで、一体どうしたんだい？」

少佐に言われて落着いてみてみると、成る程少年の体は時折ノイズが入ったようにブレている。テレポートと思っていたが、どうやら違ったらしい。

『早く、助けて・・・』

そういい残して、少年は何かに吹き飛ばされるように掻き消えてしまった。

どうやら助けを求めているらしいのだが、何処へ行けばいいのだろう？

少佐の落着きようから判っているらしいが、何故だろう？嫌な予感しかしない。

「おやおや、力が安定しないのか何らかの要因によって吹き飛ばされたか、あるいはその両方か？まあ、行ってみればわかるか」

「行くって・・・少佐！！」

「付いてきたければ来てもいいよ？あの子が伝えてきた事が本当なら、面白い見世物になるだろうね」

嫌な予感は的中したらしく、少佐お気に入りのバベルのチルドレンのマンションへ入っていってしまう。

その屋上ではチルドレンの一人と桃太郎がなぜか争っている。

桃太郎の様子がおかしいようだけれど、どうしたのだろうか？

『何らかの原因により記憶喪失になっているそうです』

「お前はさっきの！」

『先程は驚かせてすいませんでした。距離が遠い所為で声（テレパス）も上手くいかなくて、混乱させてしまいましたね』

「お前は一体？！」

『僕は星（スター）。月（ムーン）と同じように太陽（サン）の影の存在。兵部少佐にはそう言えば判ると思います。決着が付いたようですよ？続きはまた今度』

「おい、待て！！」

『もうすぐバベルの連中がやってきます。見つからないうちに撤収した方がいいですよ？それに、ホラ』

そう言われて見ると少佐が力尽きて落ちて行くところだった。

全く、あの人は自分がここにいると思って無茶をして！！

少佐を捕まえた頃にはあの少年は姿を消していた。

一体なんだったのだろう？

そう思いながら、少佐に銃を向けている男と見た。

少佐を驚きのあまり落としそうになったが、なんとか持ちこたえた。

しかし、驚きのあまり固まってしまっていた。

少佐が銃を向けられているのに、その間逃げる事も反撃する事もなくただ呆然と。

さっきまで話していた少年をそのまま成長させたような男がそこにいたのだから。

少佐に促されて、ようやくテレポートして元の部屋に戻ってきた。

混乱した頭を整理しようとするのだが、全く上手くいきそうに無い。

そんな俺に少佐はさらに混乱させる事を命令してきた。

空を彩る光　真木編（後書き）

気が向いたら、また最初からの時にでも見直して書き直すかも？話も途中で勝手に加えるかも？

なので、あえて話数は入れません。

よんでいただいてありがとうございました。

空を彩る光　　真木編（前書き）

会話ばっかりになってしまいました。

そのうち書き直すかも・・・。

空を彩る光　　真木編

『全ク、京介ガ迎エニ来ルノガ遅インダヨ』

「なにお、この齧歯類！！お前が勝手に出歩くのが悪いんだろ！」

『ヤルカ？！ロリコン』

「この齧歯類！！」

目の前で繰り広げられる低レベルな争いを眺めつつ、なんとか冷静になろうとするが難しいようだ。

資料にはチルドレンの現場主任皆本光一はノーマルであった筈、ならば自分が見たのは一体？

「気になるなら、本人に聞いてくればいいじゃないか？」

「は？」

「だから真木、彼に聞いてきてよ。もし抵抗するようなら『月（ムーン）』って呼んで彼を起こしてあげるといい。それでも抵抗するなら、きっと近くにバベルの監視がいるんだろうから諦めて帰って来るんだよ」

ーーーでも、多分大丈夫だと思うよ。

そんな意味不明な事を呟いて、少佐は自分を送り出す。

さらに「もう寝るから聞いたことはあとで教えてね」なんて勝手を言っている。

全くあのヒトは・・・そう言いながらも、従ってしまう自分に自己嫌悪という程ではないにしろ、呆れ返ってしまうのは事実だ。

自由奔放という言葉では済まされない身勝手さ、飽きっぽさ、そして面倒事を全て自分にさせる横暴さ、そんな人に何故ここまで仕えているのかと、自問自答してしまう。

バベルが目視できるところまで来てしみじみ考え込んでしまう。

「それでも結局は従ってしまうんでしょう？」

「誰だ！！」

「すいません。驚かせましたか？先程お会いしましたよね？」

振り向くとそこには確かにあの時の少年が立っていた。

敵意は無いことを示すように両手を挙げ、困ったような顔をしている。

「本当にすいません。『読む』気は無かったんですけど、まだ力が安定してなくて、本体はこっちにいます」

そう言って、先導する少年を見ると確かに幻影の力も安定して無いのか、時折わずかなノイズが走っている。

その少年が本体と呼び近づいていくのはやはり、彼(みなもと)だった。

「星早(セイ)かったな」

「うん、すぐそこだったからね。疲れちゃったから眠っていい？」

「いいよ、おやすみセイ」

「おやすみ」

そう言って幻影の彼は消えた。一体どうなっているんだ。

混乱する俺に彼は少し笑って自己紹介をした。

「はじめまして、自分は皆本光一の別人格『月(ムーン)』です」

「別人格？！」

「すいません、真木さん混乱中申し訳ありませんが、どこか話せる

ところに行きませんか？」

「あ？ああ、判った」

訳がわからないが、ここはバベルと目の鼻の先にある。

このままこうしていて誰かに見つかるのは不味いだろう。

どのみち埒が明かないのは判ったので俺の潜伏先の一つへとテレポートした。

「夜分遅く失礼します。彼の怪我とか大丈夫でしたか？」

「・・・お前に心配されると調子が狂う、銃を向けておいてよくそんなことが言えるな」

「本当にすいませんでした。あの時銃向けるのは太陽（サン）も嫌がってたんですけど、彼女がいましたから」

「彼女？」

「柏木朧、桐壺局長の秘書をしている女性（ヒト）です。どうも彼女がいると暗示が強化される傾向にあるようで、自分としては距離を置いてほしいんですけど、立場上そういうわけにもいかないんですよね」

「暗示？」

その時、少佐から何も知らされていない事を知った彼(シン)が皆本は多重人格者である事、主人格である太陽(サン)が洗脳暗示を受けている事を教えられた。

驚いた事に少佐はそれを知っていたと言う。

「では、洗脳暗示の元が柏木朧というわけか？」

「はっきりとしたことはまだ何も、ただ、彼女が近くにいると自分は絶対に表には出て来れなくて、奥に押し込められる感じなんで、すいません、わかりません。」

「そうか、ところで、あの子は一体何だ？」

「何といわれても・・・見ての通り、自分の別人格ですが？」

「何故、ノーマルのお前(みなもと)にエスパーの人格がいるんだ？」

「１０年前、いきなり学校を追い出され、親と離されて、大人ばかりの研究施設での生活がストレスになったんでしょうね。自分は低レベルながらも能力に目覚めてしまったんです。それで大人達は大慌てで自分をバベルへ連れて行きました。そして・・・無かった事にしたんです」

「無かった事？」

「自分が能力に目覚めた事を忘れるようにと、能力ごと記憶の奥底に封印されたんです。自分達がコメリカへ行ったのは決して封印が緩まぬように念入りに暗示を掛ける為だったんでしょうね。そして

眠り続ける人格『星(スター)』が生まれました」

「何故？そんな事を・・・」

「知りませんよ、そんなこと、彼等に都合が悪かったから。それ以上でもソレ以下でもない。そのままコメリカに居続ければ星(スター)は目覚める事は無かったでしょうけど、日本に来て自分と似た境遇のチルドレン達に出会って封印が緩んだ。今日の出来事です。自分と同じ理不尽な理由で桃太郎が殺されるのが我慢できなかったんでしょうね。目覚めてしまいました。ずっと眠っていた所為か１０年前の姿のまま幻影として出てきます」

「彼はどんな能力を持っているんだ？」

「さあ？１０年前に封印された時はＥＳＰ反応が出た直後に強制的に封印されたんで能力を確認する暇なんて無かったですから、詳しくはわからないんですよね、さっきの幻影がテレポートなのか、ヒュプノなのか判断しずらいですし」

「俺の心を聞いていたみたいだから、テレパスは間違い無さそうだな」

「真木さんの心を聞いたとなると高レベルの可能性ありか、でも目覚めたばかりの能力は安定しないので一概にどうとも言えませんね」

「さっきはセイと言っていたが？」

「スターなんて呼ばれるのは落着かないって言うので、セイと呼ん

でいます。自分もムーンは落着かないんでシンと呼ばせているんですけど」

「シンだと？」

「はい、ああそういえば何度かその名であなたにもメールしましたね」

「何が目的だ？」

「別に何も。ただ、バベルがエスパーにもノーマルにもいい顔しているのが気に入らないだけです。エスパーとノーマルの共存を掲げるなら、何故セイが封印された？そんな身勝手な理想、自分は許ない。それだけです」

「それでパンドラに協力していたと言うわけか？」

「まあ、そういうことです」

「確かに、一人でも使える人材が欲しいのは事実だが、お前を信じてもいいのか？」

「メールやチャットで散々やり取りした仲なのに随分な言い草ですね？」

「そっそれは、お前が少佐の部下だと思っていたからだ！！」

「まあそうだろうとは思っていましたけど、自分はセイと違ってエスパーじゃないんで、殺そうと思えばすぐ出来ます。なので、そんなに警戒しないでください。自分はパンドラに敵対する気はないん

で。第一、真木さんにハッカーの技仕込んだの誰だと思ってるんですか」

「・・・まあ、その通りなんだが」

「自分(みなもと)が言っても納得できないでしょうが、自分(シン)は貴方達(パンドラ)の敵ではありませんよ」

「味方だとは言わないんだな」

「ええ、自分は結局影の存在なんで、いつ消されるとも知れません。そんな奴を仲間とは思わないでください」

「わかった。敵ではない。とだけ覚えておこう」

「ええ、では、おやすみなさい。真木さん」

「ああ、元の場所まで送ろう」

そう言って彼を送った自分が一番彼を敵として思いたくないのだと、気づかない振りをした。

空を彩る光　真木編（後書き）

やっぱ書き直したいな。

元の文は少佐と皆本の会話文だったので違和感が！！

でも面倒なので、一応このまま載せときます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0509m/

世界は誰の為のモノか。

2010年10月10日01時22分発行